



成人向け

CP

魔王×勇者
怪人×ヒーロー
オーク×エルフ
鬼×退魔士
戦士/魔導士/神官/白騎士

属性

- ・凌辱
- ・苗床
- ・孕ませ
- ・母乳
- ・口淫
- ・エナジードレイン
- ・石化
- ・家畜化
- ・牝化
- ・産卵
- ・鼻フック
- ・触手
- ・NTR
- ・オナホ化

約肉文庫 カルビ

2018～2021 年 A5 本再録 DL 本

もくじ

第一部 背徳は、絢爛華美なり

1	無慈悲な慈愛	6
2	我が愛しき母上さま	12
3	肉の花鎧	17
4	英雄葬、もしくは祝祭	23

5	淫従ヒーロー	30
6	MaryButEndVulgarWedding	39

第二部 ルナティックセレニティ

7	毎夜ノ御褒美	54
8	魔王城、地下闇夜ニテ母胎ト成ル	60
9	ヒーローハ深夜ノ淫婦	69
10	爛レタ夜宴デ従畜ハ鈴鳴ラス	78
11	真夜中、奴麗ハ奉仕スル	84
12	未明ニ羽化スル母乙女	93
13	永遠ニ朝日ヲ拝ム事ハ有リマセンデシタ。	102

第三部 雜貨店メリー♥メリーカタログ冊子

14	勇者型ジュエルハンガー	110
15	戦士のドアノックカー・ガーゴイル	117
16	魔導士で造った燃料タンク	124
17	黒騎士専用浅漬け鉢	130
18	神官オナホール・オーダーメイド	135
19	白騎士オナホール・肉便器型オプシヨンつき	141
20	敗北勇者、墮落の結婚式	146
21	繁栄の魔王城	150

再録一覧
おくづけ

第一部

背徳は、

絢爛華美

なり

1 無慈悲な慈愛

神から与えられし鎧は碎け散り、伝説の聖剣と聖なる力が込められた盾は折られ、硬い絆で結ばれた仲間たちは肉塊となった。

「お、おつご、ふっひい！」

薄暗く気味悪い城にそぐわない嬌声が木霊する。

玉座に座る巨体の魔王に、貫かれている青年勇者。魔王の剛直が深々とアナルに挿入され、何度も出入りを繰り返す

「自分の力量もわからない未熟者の末路がコレだ、わかったか小僧」

「っほおっおお！」

ズブ、ズヂュウ！　ズッグン！

巨体の魔王は男根も大きく、挿入のたびに勇者の腹がボコンと丸く浮き上がる。

「お、おれ、はあ、お、おまえほおおっ、た、たおひゅう！　たおひゅんらあほっ

おおっおおおん！」

「まだ折れないか、」

パン！　パン！　パンパン！

興奮のまま、魔王の腰使いが荒くなる。

秘所を何度も抉られ、穿られ卑猥な穴へ変えられた肛門は、激しいピストン運動にも柔軟にうねり動いて快楽を貪ってしまう。

「ふっぎいおおおっ♥ いっぐう、いっぐううう!!!」

ブッビュ、ブッヂュ!

アナルから直腸汁が噴出し、身体が大袈裟に跳ね上がる。萎えたままの花芯が、ねつとりとしたカウパーを垂らす。

「肉体はすっかりメスに堕ちたのに、勇猛なことだ」

「くひよ、くひよおおおっおひい♥」

抓られる乳首から痛悦が炸裂する。女性の乳首よりも真っ赤に、大きく太く勃起しているソコは、既に青年を苛めぬく淫らな蕾になっていた。

「小僧、本来ならお前も処理すべき存在だが我と多少はやりあったのだ、その功績に免じて慈悲の一つはくれてやろう」

ペニス引き抜かれ、魔王が立ち上がる。青年の両手ごと腰を掴み、もう片方の手は頭を握りしめる。

「魔物を産む苗床として生かしてやろう」

「や、やりや、いやりやああ! いらにやいい、魔王の子供なんていりやないいいやああおほっおごおお♥」

ズブ、ズヂュウズブヂュウ!

グズグズに蕩けた肉壺へ、あっけなく挿入される巨根ペニス。異形の生殖器はあつと言う間に直腸を占拠し、射精寸前に、二回りも膨張した。

「ひ、ひいいい!」

「確實に孕ませてやる——フンッ！」

ドボボ、ボボボッブヂュウウウ!!!

腹が破れそうな勢いで種付けされる。鶉の卵ほどある精子が、ザーメンに流され大腸の奥にまで流されていく。

「おおほおお♥ あ、ああつひいい、いぐう♥ いぐう♥ いぐううう♥ なえどこにひやれながらあいぐう、いつでりゆうううう♥♥♥」

ビク、ビク、ビク！ ビクビクウ！

嫌なはずなのにメスイキがとまらない。子種が腹にブチ撒けられるたびに、身体が震える。屈辱と嫌悪が白濁熱に溶かされて消えていった。

「ハア、オッ、オオッ♥ オっほお♥」

ヌポッ、ぬほ、ヌぽぽッポッポッ！

力む呼吸と合わせて、肛門から拳程度の卵がでくる。

「ふっぎいいいっぐう！ いっぐう♥」

五、八、十一……。卵は次々と青年の肉壺から飛び出し、二十二個目で産卵が終わった。

全裸に枷と鎖のみの苗床生活に、青年は満ち足りていた。魔王の子を孕み、産み、育てることに喜びを見出していた。

「はあ……♥ はあ……♥ つひいい♥」

チュルル！ チュルルル！

殻を破って生まれたばかりの魔物が乳を吸ってくる。胸から突き抜ける解放感に、射精快感を覚えて股間が熱くなる。

しかし股間からぶら下がるモノは大きくも硬くもならない。花芯はクリトリスのよう小さく縮み、苗床奴隷の印にリングが貫通していた

「よく産む苗床だ」

「魔王さまあ♥ あああん♥」

魔王の指がリングを引っ張る。過敏な神経が密集した肉豆からビリビリと快感が走って簡単にアクメに達してしまう。

グイ！ リングを摘まれ振じられる。

「いつぐうう♥ メスチ×ポいぐうう♥ 種ナシしやせえいぐううう♥♥♥」

ピュ、ピュップヂュウウウ！

豆陰茎から透明な飛沫が飛び散った。

肉体を快感電流が駆け巡り、乳首が硬く凝こってミルクが滲み、肛門皺が勝手に捲れ返り直腸愛液がビューと噴き出す。

「つきやあおおほっおおお♥♥♥」

胸に張り付いていた赤子が、硬く敏感になった乳首を遠慮なく噛んで、母乳を飲み干していく。

「あああっひゅごいい♥ いぐ、まだいつひやうううう♥♥♥」

子を抱きながら魔王に頭を下げる。

「魔王さまあ♥♥ 魔王様の逞しい牡をお、どうかこの苗床メスにいい♥ お慈悲い、お慈悲いをおお♥♥♥」

「産んですぐまた孕もうとするか、なんとも仕事熱心な苗床だ。その熱心さに免じて、種付けしてやろう」

「ありがとうございませうう！」

「今のお前の姿をみたら、肉塊になったお前の仲間は思うだろうな？ 小僧」

魔王へ爛れた肛門をみせつける。今か今かと待ち構えているアナルは、肉棒が恋しいあまりに湿って捲れかえる。

「どうでもいいいれひゅう♥ 魔王さまの逞しい牡チ×ポさまから子種を頂いて、御子を孕み産むのが、元勇者苗床の幸せです！ それ以外はどうでもいいです♥」

「ハハハ、酷い奴だ」

ドチュ！ 笑いながら肉穴へ巨根剛直を挿す。青年の腹はボコつと膨らむ。パンパン！ パンパン！

魔王が前後運動を始めれば、結合箇所は川のように愛液を垂らしていく。

「おお、おおお♥ たくしやん、魔王さまの御子を孕ませていただきまひゅう♥ んぎい、魔王ひやまのおち×ぽひやま、ぎぼひいひゅうううう♥♥♥」

四肢が跳ね、豆ペニスからメスイキ汁が噴射される。快楽で表情が緩み、だらしなく涎が垂れていた。

「お前に慈悲をやって正解だったな。苗床としても肉穴としても最高だ」

ご褒美だと、魔王はリングを摘み、陰茎を扱うよう前後に動かす。

「くくおほおおおっ♥ いぐう、いっぐいぐいぐううう♥♥♥」

肉壺と肉豆からいっぺんにエクスタシーが炸裂し、頭も視界も真っ白に包まれる。魔王の肉棒と指の動作だけが鮮明に思い描ける。

「おじひをくだひやり、ありがとうございまひゅう！ まおうさまあ♥」

心からの感謝を述べた次の瞬間に、種が注がれる。腹を埋め尽くす鶉の卵程の子種に歡喜の悲鳴をあげた。

4 英雄葬、もしくは祝祭

美しい肢体は薔薇とフリルがあしらわれた白のドレスに包まれ、四つん這いで周りに見せつけていた。

「ブヒ、ふっご、ごお……！」

金糸が縫われたフリルが、尻が左右に触れるたび可愛げに揺れる。ミルク色のストッキングは既にボロボロで、汚汁に濡れて肌と一緒に濡れ光っている。

「見てみる、お前を信じていた者たちが、お前の悲惨な姿を目にしているぞ」

「おごおお！ ヒッギ、ンギイ！」

魔王に引つ張られる鼻フックに、鼻孔が大きく歪み、鼻腔を貫通している白銀の指輪に鼻水がかかった。

かつて魔王を倒すために、旅だった国の英雄は、魔王と大勢の魔物を引き連れて哀れな姿で帰還した。

「英雄様が……」「魔王め、なんと惨いことを」「死ぬよりもきつい拷問だ」

変わり果てた姿の英雄に同情と憐れみを人々は示し、それを聞いた魔王はニヤリとしながら、英雄の肛門孔へ剛直を擦りつけた。

「今日は随分と大人しいな、どれもって惨めで墮落したお前の姿を見せつけるがいい」
「つぶつぶおっほおっひい♡♡♡」

ズブ、ズグヂュウウウウ！

湿った音が街中に響き、一拍遅れて英雄の腹からブヂェル！と腸鳴りが大絶叫。恥ずかしそうに泣いていた英雄は、たちまち喜色満面の笑みへと変貌。

「おち×ぼお、おち×ぼおはらめぶひいつぶつほおおひい♡ いぐ、いぐうう、雌豚奴隷いぎまひゅうぶひい♡」

可愛らしいボロボロのショーツから男根が膨れ上がり、魔王に最奥を小突かれるたびに、豪快に白濁液が飛び英雄が歩く道を穢していく。

「な……。勇者様が……」「あんなことされて喜んでいやがる」「嘘だろ、勃起までして」

「ほら、もつと早く歩かぬか」

パンパン！ パンパン！

リズムカルに腰を穿つ魔王。肉棒と肉穴は互いに絡み合い、結合するたびに大量の愛液を噴射させる。

「っあああああ♡ あ♡ アいつぐウ、いつでぶひい♡ こ、こオれいひよう、イカへらやいれえ、魔王ひやまあ♡」

魔王に媚びる勇者の声音。眉を八の字に下げ、涙を流しながらも 口角は幸せそうに上がっている。

「あんな変態行為見せつけて、楽しんでやがるのかよ……！」「そうやって媚売って自分だけ助かるうとしてるのかよ、裏切り者」「裏切り者！」「裏切り者！」
悲壯を浮かべていた人々が、徐々に困惑から怒りへと変化していく。

「オッおッお♥ ふつごぶひい♥ いぐいぐいぐう♥ みられでいぎゅう♥」
ビュル、ドビュウウウ、ぶっびゅぶう！

視姦だけで花芯が果てる。数百の憤怒と怨嗟の目が雌豚を貫くが、墮落英雄にとっては肌を劈く視線すら快楽のアクセントにしかない。

「まったく最高のパレードだ！」

魔王は悠々と凌辱パレードで街を一周し最後に城へとたどり着いた。城は既に魔物によって占拠されている。

「——つごお♥」

四つん這いだった英雄が魔王に抱きかかえられる。より深くなった結合と肉棒の圧迫感に、グルンと瞳が一回転した。

魔王は城内の奥、王座の間へ歩いていく。その間にも肉壺を嬲られる勇者は鳴き狂いながらドレスに包まれた体をくねらせた。

「貧相だが、まあ、座り心地は悪くない」

「ふつごお、おお♥ ふつごおお♥」

玉座に腰掛ける魔王。そのまま重量に従い肉棒がさらに雌豚の腹を抉る。

「しっかりと見せつけろ」

魔王の目線の先、巨大な水晶玉が置かれており、水晶にはそこには城の外にいる人間たちが映っている。人間たちも王座の魔王と、その上で腰をふるう勇者の姿と声はつきり伝わっていた。

「ぶひい♥ おち×ばお♥ 魔王さまのおち×ばおおう♥ ぶひい♥ ごもぢい♥ ずっとこうしてエパコパコしたいぶひい♥」

身体中を使って魔王に抱かれる歓びを表現し大勢に見せつける。汚れたドレスの裾を持ち上げながら、一人腰を躍らせる。パニエと指輪が腰に合わせて、蝶々のよう舞う。

「なんなんだよ」「いつたいなにをみせられているんだ」「ハハハ……」

英雄の面影もない、ただ一匹の雌になった男に怒りすら通り越し、民衆は思考放棄するしかなかった。ただただ魔王と勇者のセックスを眺めつづけていた。

死んだ目を浮かべる人間たちの顔をじっくり眺めながら、魔王は満足げに目を細め雌の腰に指を喰い込ませる。

ドン、グヂュウ!

剛直がさらに奥へと挿入され、腹がペニスの膨張だけで膨れ上がる。

「そら、イケ! 無様な英雄のメスイキ顔を見せてやれ!」

ドボボブッゴオオオオオオオ!!!

膨大な量の精液が勇者の肉壺にブチ撒かれ、狭い排泄器官を荒れ狂いながら種付けしてく。

「ぶっひいいいいぐ、いぐっ、いつぐううう♥ 雌豚奴隷いぎまひゅぶひいぶっごおおっふひいいいい♥ みいへえ、雌豚英雄の、ケツマ×コ♥ 魔王さまのザーメンドクドクって注がれてるうろおおふっぎいいい♥♥♥」

水晶玉越しに見ているであろう、人間達に向かって、アへ顔の笑顔をつくり両手でピースする。

「おつごおぶつごほおお♥ ふつぎいい♥♥♥ おええつごおお♥」

口と鼻から精液が逆流してくる。白いドレスが白濁色に覆われ、薔薇が黄ばんで汚れていく。指輪が精液に揉みくちやにされカチャカチャ音を立てる。

魔王の射精は、英雄の口と鼻からは精液が滝のよう流れつづけても終わらず、長い時間人間たちへ見せつけた。

・
・
・
・
・

——一年後。

魔王に統治され魔物の国となった、元人間の領土で国典式がおこなわれていた。王都の中央に像が建てられた。

魔王に鼻フックを牽かれながら歩く、四つん這い英雄の銅像で、この像を見た魔物たちからは、拍手喝采の嵐が止まらない。

「一年前の今日を現した見事な像だろ？」

「ぶひい、ふっひい♥」

嗤う魔王に、英雄は返事をするように膝に頭を擦りつける。

一匹の雌豚となった英雄は、一年前と同じ薔薇とフリルの白ドレス姿に四つん這いで魔王の傍にいた。一年前と違うのは、腹が大きく膨れていることと、人格と言語が崩壊したことだろう。

「ああ、今日はめでたい日だ。永遠に今日は、我ら魔族にとって祝うべき日になるであらう」

上機嫌に指輪を引っ張れば、魔王専用の雌は上機嫌に甘く鳴いた。

英雄葬、もしくは祝祭

第二部

ル[#]サ[#]子[#] イ ッ[#] ㇿ[#]

ㇿ[#]ㇿ[#]ニ[#]子[#] イ

11 真夜中、奴麗ハ奉仕スル

煌々と月明りが射しこむ時間に、魔王が遠征から帰還した。

専属娼夫である勇者は刺青塗れの全裸から艶やかなドレスへ身を包み、魔王が待つ部屋へ重い足取りで向う。

「遠征が思ったより長くかかり、随分とお前を待たせた。その淫呪に苛まれた肉体では我慢できなかったのではないか？」

椅子に腰かけ柔和な表情を浮かべる魔王を無視して、淡々と娼夫は、魔王の足元へ座り込む。ドレスから微かに覗く素肌、淫紋が我が物顔で勇者の体が刻み込まれていた。

「こんなくだらないモノに俺は惑わされない。必ずキサマを殺してやる」
殺意の籠った目で魔王の逸物を取りだすし、小さく唸る。

「戦場は碌に風呂にも入れるからな」

「川で水浴びぐらい……できるだろ……女も犯さなければ……こんな、ザーメン塗れになることも……スンスン……くう……不潔だ……」

龟头表面から根元どころか陰囊まで恥垢に干からびた精液で汚れ、赤黒い陰茎は黄ばんだ白一色だった

涙がでるほどの悪臭に顔を顰め、しかしドレスに隠れた淫紋が仄かに光りだす。

「さあ、その愛らしい口でいつも通り、熱烈に奉仕してくれ」
「うるさい」

舐けられた通り、鼻を肉棒に擦りあて嗅ぐ。鼻腔から腔内へ凄まじい牡と獣の激臭に鼻の粘膜がジウルジウルと分泌され、匂いだけで妄想した口が粘っこい唾液を生成してしまう。

「……スンスン……スウ……ひどい匂いだ」

「だから、お前の口で清めろといっている」

魔王がむずんと胸を掴む。淫呪によって変化した胸はたわわに実り、熟れた果実のよう勇者の胸で揺れていた。

「あっひん！」

刺激されるだけで感じてしまう。指を払いのけ、自分で掴むだけで腰の奥に電気が走った。

「ハアハア……この……覚えていろ……必ず、必ずだ、必ずキサマを殺してやる」

涙目になりながら、動脈する魔王の巨根を爆乳で挟み、柔和な圧迫感を与える。

「おお……いつ感じててもやらしい乳房だ、ドレス越しでもわかるぞ」

「うるさい……！ あぶう、んぢゅう」

胸からはみ出た部分の肉棒を呑みこむ。

恥垢と固まった精液、汚汁塗れの亀頭表面、塩辛さと苦さに顔を潜めるが、口一杯に感じる肉塊の弾力と堅さに圧倒され、吐き出すどころか腔内で軽く感触を味わいつづけてしまう。

「おやおや」

「んぢゅう、れろ、れろれオ」

ぐじゅぢゅぐぢゅ。涎をたつぷり舌先につけて、亀頭に擦りつけブラシのよう忙しく舌先を動かし、亀頭の垢をふやかしていく。

「んぢゅう、ズッゾゾ！」

不意打ちで尿道に舌を押し込み、残る精液の残滓を吸い上げる。そうすれば悠然と見下げてくる魔王の腰が、情けないほど大きく跳ねるのだ。

「……………っ、おおっ！ やはりお前の口は名器だな……………くううう、いまにもブチ撒けてマーキングしてしまいそうだ。どうだ、いまならお前の腹の奥深くに注いでやるぞ、ほしか？」

「ほひくふあいんぢゅううう」

「そうか」

変わらず柔和な表情なままだが、魔王は苛立ちで殺意を込めて睨んでくる。しかし気にせず、亀頭の恥垢を舌にのせて見せれば、すぐさま御主人様としての余裕を取り戻す。

「ひよっひやぞ」

「丁寧に咀嚼しろ」

「はい……………んじゅ、ぢゅうつごつくん」

うがいするよう、唾液と垢で頬を膨らませゆっくり嚥下していく。胃袋に入れていいモノではない。脳からの警告と淫呪の板挟みになり、クラクラと酔いに似た感覚を覚える。

「はあ、あう、ふうう」

むにゅ、ジュール、ズチュ、むちゅう。夢中で男根の汚れを飲んだことを隠すよう、手が少し慌ててパイズリに集中しだす。柔さに深く包まれながら、弾力で肉棒が打ち返される感触に魔王が目を細める。

「はあ、はふう、ふううんっ、ンベえろおー」

むちゅ、むぎゅ、むつぎゅむつぢゅう。胸の谷間へ涎を垂らして滑りをよくし、そのまま肉棒を圧迫しながら何度も柔肌で摩りあげ、時々尿道から滲み出るカウパーを、溶けかけのアイスを舐めるよう取る。

「あぶう、んぢゅううんぐう、ふう♥んぐう♥ぢゅぶうう、んぶうぢゅう♥」

ズボボボ、ボツヂユ。竿の下半分をパイズリしながら、上半分は垢がふやけたと思い根元まで呑みこむ。肉塊に唇が癒着したよう唇で愛撫し、頭を前後させる。卑猥に開発された口から喉まで、キュウキュウと勝手に窄まる。

「そろそろ、だしたらどうだ？」

「っ、でないイ……つきや、あひイ♥」

ギユム！ ギツチュ！ 服越しでもわかるほどピンピンに勃起した乳首を摘まれる。根元を搾られ、指の腹で乳首を擦られ、引っ張られる。

「はあ、ああ♥や、やだ♥で、でつりゅう♥」

ピュル、ブツピゆるウルル！ 母乳が噴き出し、真ん丸の染みが胸の頂点へ広がっていく。ドレスの中では胸の谷間へ滴り落ち、生温かく滑った感触がしてゐる。

「ほら、脱げ」

「……みるなあ」

肩紐が魔王の指で簡単に落ち、男にはアンバランスな桃果が直接視線を浴びる。乳房にも淫紋は侵食しており、娼夫の本心を表すようピンクに光っていた。

「ハアはあはア……！ 乳首、乳首で、こんなア！」

ビュ、ビュルル！ ブッビュ、ズビュー！ 肉棒を直接胸へ押しつけてのパイズリ。乳袋を軽く押すだけで硬く凝った乳首から母乳が噴きだし、乳首でペニスを擦っていると、火花が散るような快感が飛び散って頭がぼんやりしてくる。

「チ×ポ、チ×ポ、チ×ポオおお……♡ あついイ、おっきい、ドクドクしてりゅうう………こんなのズルい……ハアハア」

バチュン、ちゅるん、むちゅにゅう。ミルクローションを得たパイズリは子気味良く滑る。上下へ動かす手の動きがはやくなる。

「くひゃいろにイ、んぶう、きたらいろにイずば、くちも手もとめられりゃい、ずつぽおとおお……！」

頬を窄ませ、思い切り息を吸い込む。魔王への肉棒奉仕で下品な顔をしている自分を想像して嫌になる。

「お、おお！ 最高の口マ×コだ……！ パイマン奉仕も忘れるなよ」

「んっぢゅ……ぢゅううう！」

ぱっぢゅん、ぱっぢゅうん。眉を顰めながら自分の両手でも余る乳果をスポンジで肌の汚れをとるように、乳肌で牡棒の垢をとっていく。

「ンジグデユ……ちゅう、ごつくん……ぶはあ」

ずぶずぶ……。肉棒を深く咥えこんでいき、竿の垢も丁寧に呑みこむ。唇に垢が付着し白い口紅でもつけているようだった。

「ハアハア、おわった。ごほうししましたあ、もうらめ、おくちもおっぱいもキモチよしゆぎてだめえ♥」

「こちら、まだ伽は終わっていないぞ」

「ふああ♥」

ブビューー！ 爆乳を強く掴まれた勢いで母乳が勢いよく噴きだす。赤黒さを取り戻したばかりのペニスが今度はミルク色に染まり、ヌチャヌチャと谷間を往復する。

ズリユバデユ。ズリユズリユデユ。胸を掴まれたまま魔王自らから腰を動かしたし、手持ち無沙汰の勇者は、でっぷりと丸々肥えた陰囊を持ち上げ思い切り搾りだした。

「オオッ、堪らないな」

「んちゅう、ちゅうっぱ、ちゅう、づちゅううう♥」

さらに、胸から競り上がってくるたび、龟头へ何度もキスをおくる。

「本気のキスか？」

「ちがう、ちゅう、誰が、チュッパ、きひやまなんかにちゅううっ♥」

条件反射で否定するが、夜伽前の魔王への嫌悪も溶け失せ、ただ胸一杯の淫熱に身を任せているは、激しく光る淫紋を見れば一目瞭然。乳首を抓りながら、子種を吐き出す寸前の龟头を胸の谷間奥深くへ押しつける。

「そら、胸で孕め！」

ドッビュ！ ドブブブビュルッビュルルル！ ブビュー！ ブリュウウウウウ、ブシャアアア！

「あひイ、あっひいい♡　む、むねでえいつぐうう、いつでりゆうっほおおおお♡♡♡」

心臓を叩かれる激しい水圧、桃果を蕩かすほどの熱さに、娼夫勇者の意識は桃源の彼方へ飛んでいく。

同時に噴射した母乳とザーメンが混ざり合い、谷間から滝のよう流れていく。

「ふっひ♡」

にゆるんつと肉棒が胸から抜け落ちる。柔肌をわざと雁首で引っ搔かれ、甘美な電流に腰が砕け体勢を崩して床へ上半身を打ち付けてしまう。

「おっと」

「ふっぎいいいい？！？」

むっぎゅ！　ぎゅむ！魔王の足が思い切り爆乳を踏みつけ、ひしゃげ歪んだ胸から勢いよく乳白液が噴射。

「すまん、すまん。わざとでないんだ」

「ふっぎ、ひっぎほっぎいいいい！」

「ああ、すまん。母乳で滑って上手く足がどけれなんだ、すまん」

加虐心に満ち溢れた笑みで、娼夫の爆乳を踏みつけつづける。娼夫勇者は胸の痛みとマゾ快樂に、尻を振りながら乳責めだけで達してしまふ。

「でつりゅ、みりゅつくだひひやううっほおっひっひやあああああ〜♥♥♥」

ドッビュビュル！ ブッビュルブシャアア〜！

母乳が一直線に噴き、その乳射に連動して尿道からは精液を噴きだす。射乳快樂と同時に花芯でも果て、娼夫のドレスは全身城に覆われた。

「はあはあ……はあああん……」

「ココにも欲しいのではないか？」

「〜っおお♥」

倒れた格好のまま尻をなぞられ、指が肛門皺をさする。激しい媚電流とじれつたい淫熱が込み上げ、喉の奥から言葉ができてそうになる、しかし寸前で唇を噛みしめ、魔王を睨む。

「ほ、ほじ、ほじぐ、らんか、らいイ！」

「そうか、残念だ。だが淫呪に支配された身だ、辛くなったらばいつでも私に媚びへつらつて、求めるがいい」

「……ハアハア……キサマの女になど、ならぬ！」

「いつまでそう言っていられるだろうな？」

「夜伽は終わった！ 部屋に戻らせてもらう」

魔王の足元から逃げ荒々しく扉を閉めてでていった娼夫を見送ると、指に付着しているミルクを舐めて魔王はわらった。

第三部

雜貨店

メリー♥メリー

カタログ冊子

15 戦士のドアノッカー・ガーゴイル

戦士は魔王城の武器庫の扉に装飾されていた。

扉、丁度腰の位置くる場所から生尻を剥きだして錠前として。反対側、部屋の中からは、鼻に大きなリングをつけて扉から鼻と唇だけをだしてドアノッカーとして。

武器庫へ股間のモノを隆起させながら魔物たちがやってくる。

「へへへ」

ずっばお！ 魔物兵士は自分の牡棒を肉鍵としてさしこみ、激しいピストンをおっぱじめる。

「たつく、武器庫のセキュリティが強化されたのはいいが、解錠もめんどくせえつたらありやしねえぜ！」

「っおおお んっほひいいいいい♥ くひよくっひよおおくっひよおおおおお♥♥♥」

「相変わらずうるせえ鍵だぜ！ おら、とっと鍵開けやがれ！ おらあ！」

ずっばお！ ずっばお！ ぐぼおおお！ 勢いよくリズムカルな腰振りを十回ほど繰り返す。

「ほおおおおんっほっへあっひいいいいい♥」

ギュー！ ギュボボ！ 戦士の尻が思い切りペニスを絞めつける。錠前として改造された戦士は激しいピストンを十回味わうと、自動的に排泄器官が窄まり精搾を行うのだ。な

「おら！ 牝ケツ扉をザーメン開錠だ！」

「んほおおおつへあいぐいぐいつぐうう 魔物にイガじやれつりゆつぐつほおおお



「おらよ！」

バチン！

「ひん♡」

魔兵士たちが部屋で用事を済ませると、今度はドアノツカーである鼻輪を手を取った。

「ド淫乱扉のザーメン搾りテクのせいで萎えちまったしな」

「ふっぎいいいいっ♡」

「俺なら変態メス扉にされるぐらいなら死を選ぶぜ」

「こうはなりたくねーな」

「無様だよあ！」

好き勝手言いながら魔物たちは武器庫からいいながら出て行く。

「ころせ、ころせえ……ころっおお♡」

ぶっびゅぶるうう……。肛門に残っていたザーメンを垂らしながら余韻に浸る。

戦士の身心は既に淫乱家具として墮落しているのだ。

.....

魔王城の卑猥なセキュリティにされた戦士が、何より屈辱を感じるのは月一の点検と称した城の警備を担当する魔王の配下の一人に弄ばれるコトだ。

「さて、点検を始めましょうか」

「うう……」

まず扉から解放された戦士は自分の体の変化を嫌というほど自覚する。扉に収めるために【箱化】され、手足どころか骨ごと肉体が魔法により折りたためられているのだ。

「特に見た目に異常はありませんね」

「く……」

「次はセキュリティとしての精度の検査を」

「っおお♡ んほおおおっ♡」

ズボッ！ 魔物の牡棒により手輕に尻穴を犯される。折りたためられた肉体は、幹部の手に収まり両手で好き勝手上下に揺さぶられる。強敵がすぐ傍にいるのに何もできない無力さ、肉体が変形した無様さ、性玩具のよう扱われ自尊心など軽々と砕け散る。

「こ、ころっへ、ごろっへええほんおひゅぬひゅんう♡ マモのち×つぽでイギぢにゅうほっへえええはああああああ♡♡♡」

「相変わらずいい反応をしますね」

ズボ！ ズボッ！ ズボッ！！ 肉杭を奥深く撃ちこまれる淫らなインテリア戦士は浅ましくもよがってしまふ。

「おっぐううう♡ ほっひ♡ おっぐううう、はいっでっぐっりゅうう♡♡♡」

「おおおっ、この絞めつけ！ 一切の不備なし！ 今月もオナホ家具として満点ですよ！！」

ドブっブッビユるウウウウウウドぼぼぼぼっ！！

「んぶつぶうぶつべえええああああ♡♡♡」

体が折りたたまれている分、直腸から腔内まで一気に白濁熱汁がいきわたり、逆流嘔吐してしまふ。まるで肉噴水。

「ふう……これで今月の点検は終了ですが残念なお知らせが……。実は、魔王様が施錠道具を代えるそうです。些か不便だと兵士たちから苦情が入って、君はお役御免となりました」

「げっほ……ほお……♡ はアはア、ああ、ならとつと殺してくれ」

魔王城の家具として晒されつづけていた戦士は、いつそのこと早く死んでしまいたいと願っていた。望みがやつと叶うと安堵が胸いっぱいに去来していた。

「殺す？ まさか、そんな勿体ない。実は前々から私、部屋の扉に警備として番犬が——ガーゴイルが欲しかったのですよ」

「——は？」

「魔王様には承諾を既に頂いています。点検にも不備はありませんでしたからね、このまま私の魔力を含んだ精液で、ガーゴイル生まれ変わらせてあげましょう」

「ふざけるな!! いっそ殺せえ! いやだあ——お♥」

ズブズブズッポ、ズッブウ! 一度精液を中出しされ濡れそぼった肉穴は、軽々と魔物の肉棒を受け入れる。

「ガーゴイルとしての自我が芽生えて、喋れるようになるまで五百年ほどかかり暫くはただの石像だが、その間もしつかりケツマ×コの感度も、意識も視覚もありますのであまり怖がることはありませんよ」

「やめっろんほおほおほ♥♥♥ ほっひ♥ ほっへえええふ、ふがアあっほおっつゝおっくううういぎゅう♥♥♥」

ズラン!! ずっぱお!! ズラン!!

腹を突き破りそうな深く酩酊するピストンに白目を剥きながら痙攣アクメを繰り返す。箱化で折りたたまれている手足は、暴れることも叶わない。ただ癡猛なペニスの感触を肉穴で味わいながら、喘ぐしか今の肉家具戦士にはできなかった。

石像の主である魔物は時折、その腹を愛おしげに撫でながら、無機質と化した肉穴に何度も己の怒張を突き立てた。
扉の肉穴インテリアガーゴイルとなった戦士が自我を持つまであと五百年の時間を要する。

16 魔導士で造った燃料タンク

黒魔導士が工房へ入った。工房の中は、鬼火でつねに明るいが少々薄暗い。

そして魔導士の使う工房——研究室にはホルマリン漬けの何らかの胎児、呻き声をあげる本棚、ヒトの皮を剥いでつくられた皮のノートと碌なモノが置かれていないが、ココには彼しか来ないので特に問題はない。

さらに最近は新しい実験道具——魔王に敗北した勇者一行のメンバーであり、かつて己の弟子だった白魔導士を元に造った燃料タンク——が魔王様から贈られて、工房内はいつも物が多くなる一方だ。

魔術研究には多くの固形魔力を消費するが、値が張るのがネックであったが、これからは燃料費については考えなくていいのだ。

工房の奥、手足を専用の土台に癒着され、固形燃料を製造するための細々とした装飾品をつけられた以外は全裸で設置されている、燃料タンク。

むずん、むぎゅ。臀部へ触れて、数かい揉みほぐして感度を確認する。

「ひうう?! ひゃっ!」

質の良い固形燃料を生産するには、肉体の感度に直結している。だから使う前には魔力タンクの臀部へ触れ感度の確認を怠らない。

「おおおっおっひ、ふっひいひい♥」

通常の状態であれば、縦割れアナルが愛撫するだけで肛門皺を捲り返して薔薇肛門へ変化する。

今日も良好状態なのを確認すると縦割れ肛門へ肉棒を押しつける。

ズブヂュウウウウ……。

「ほおひいいい……♡」

初めのころはタンクの分際で仕事の拒絶をしたが、今ではすっかり牡棒の虜になって自ら進んで肉壺のナカへ誘い込んでくる。

むぎゅう。

「ほひい……♡♡♡」

肉棒を動かしながら、むつちりと肉付きの良くなつた臀部を掴みあげる。贅肉で、男の指が見えなくなるほど、尻肉へ深く食いこむ。

ズンズン、ズブズブウウウウウウウウ！ ズンズブズヂュウウウ！ パアン！ ドビュドビュドビュびゅびゅびゅつびゅつっ！！ ドブズブズヂュウウウウドブボボボボボッ！！！

「おおお ひっひよ ひっひよおっろおお♡ ひゅごい♡おおお……っっ

♡♡♡ け、けちゅま×っこおおおあつちゅい♡ ひ、ひいいいっくううう♡♡♡」

動きを段々と早めてピストンへ移行し、射精に至るまで三十秒もかからない。重要なタンクに材料を注ぐことなので、少しの刺激で大量の精液が吐精できるよう、自分の生

殖器は改造済み。しかし元弟子の淫乱な肉壺を考えればこの改造は不要だったかもしれない。

どぶつどぼぼっぶっびゅぶううううううー！

「おおおおお♥ いぐうういつぎゅうう♥ ししょーのおチ×ポでいぐ、いぎまちゅううほおおおおお♥♥♥」

改造男性器の精液量はリットル単位で注がれる。ちよつとやそつとで終わらない。

燃料ザーメンを尻壺に溜めている間、弟子は滝のよう涎を垂らし、固定された手足がガクガクと痙攣させながらひたすら喘ぐ。白魔導士としての清廉さも、人間性も、固形燃料製造タンクと化したことで破壊されきった。

「いっぐウウふえあああひつぎいいいいいっばいはいっでぎでりゅううう
おおいぐいぐうう♡♡♡」

自分の逸物で喘ぐ元弟子に優越感で頭を撫でる。魔導士としての才も莫大な魔力も自己より遙か上をいった弟子がいまは、無力と化し、ただ自分専用の工房道具の一種に成り下がったのは実に気持ちが良い。

「もつとおおお もつとおおおほぢい いいほおおお ♡♡♡」

ぷつん。蜥蜴の尻尾切りのように魔術師の生殖器が切れた。長い射精時間に時間を

割くほど暇ではないからだ。

男根はそのまま回転しながら、肉壺のなかで精液を攪拌します。高品質の燃料を作るには満遍なく魔力を吸わせ染みこませる必要があるのだ。

ビリビリ！ バチバチッ！ ビリイイッ！

「ッあああつ?! ひええ！ えほっふうううう♡」

乳首に飾られている雷の魔水晶により、ピアスから微弱な電流が快楽を与える。肥えた尻肉をぶるぶるさせながら、肉タンクが快楽を感じれば、感じるほど、快楽指数が高ければ純度の高い魔力燃料の魔水晶を生み出す。

さらに面布に描かれているマークが光る。視覚を遮断し他の感覚を研ぎ澄ませる呪具だ。これで電撃の刺激と肉壺を攪拌する改造生殖器の動き、さらには昂ぶったタンクの肉体は空気に触れているだけで軽いアクメに何度も達し、最高級の燃料を生み出してくれるのだ。

「ほっへああひいひいっへえええええ♡ おおおっッお♡♡♡♡」

弟子の嬌声を音楽代わりに、椅子に腰かけ読みかけの禁忌魔術書に手をつける。

じつくりと分厚い本の解説に勤しみ、読み終えて時計を見れば五時間も経っていた。

魔導士は本を閉じ、製造タンクの元へ。

「……ほえ……おおお……へええ……♡♡♡♡」

だらしない口元、真っ赤に火照った肌、甘酸っぱい汗の匂い……固形魔力燃料が完成したサインだ。萎え干乾びた元逸物を引き抜き、捨てる。

バヂン！ バヂン！ バヂン！

「おっ♡♡♡♡ い、いっぎゅっ♡♡♡♡」

尻を叩いてやらないと、固形燃料がでてこないのが少々欠点だが、魔王様からの貰いものにケチをつけるわけにもいかない。臀部が真っ赤に色づく、ようやく菊皺を捲り返し固形燃料を吐き出しはじめる。

ぶぢゅ♡　ぶっぼぶぢゅりゅっぶ♡　ぶぢゅりゅっぶ♡　ぶぼっぶっぼっぶっび！　ぶっび！　ぶぢゅっぶぢゅううっぶぢゅっぶっぼっびいぶぢゅりゅぢゅりゅっぶ♡♡♡「おっひいっへええ、あひっひひっくううう♡♡と、どまつりゃんやふっひいひい♡♡♡　いぐいっくううう、おひり、おっひりでいっくううう♡♡♡」
水晶のように輝く桃色の半固形が薔薇肛門からヒリだされる。今回は上々といったところか。

ぶぼぼぼっぶっぶぢゅうううううう♡♡♡　ぶぢゅびりゅぶぢゅりゅぶりゅぶりゅぶりゅうううぶぢゅううううううぶぢゅうううう♡♡♡　ぶっぶっびっぶうううぶっびりいぶりぶっぴいイイイイ♡♡♡

胴回り十センチほどの魔力燃料がタンクの真下に設置されている回収箱の中に順調に落ちていく。

「あひ……♡　ひっは♡　いっくう……♡」

じゅぶうどっびゅ……どびゅ……どびゅ……。

排泄アクメに連動して花芯から白濁が零れるが、こちらは特に研究には必要ないので放置する。

ブビブビ！　ブピピピッ！　ブボブボボオオオッ！

燃料を出し切り空っぽになった音が尻壺から聞こえてくる。回収箱を確認すると規定量確保できている上々だ。

ズブズブユウウ！

「んっほっひふえーっー♥♥♥」

再び生殖器を挿入する。今度は固形燃料のためでなく、タンクの食事のためだ。この淫らな燃料タンクは、餌をやらねばタンクとして活動できないのだ。

本物のタンクは餌など必要しないというのに……やはりこのタンクはいささか使い勝手が悪い。

しかし魔王様から贈られたものにケチをつけるわけにはいかない。なにより、この燃料タンクは私に使われてこそ価値があるのだ。

21 繁栄の魔王城

かつて人が住んでいた城下町には魔物が暮らしており、人の王族が住んでいた城はすっかり魔王軍の物として使われている。

「視察だ、オマエもついてこい」

「はひい♥」

城内を我が物顔で歩くのは、魔王で、その傍らでかつて勇者だった牝奴隷の、リードを引つ張りながら四つん這いでついていく。大きすぎる乳袋肉が床に擦りつけられ、母乳の道標を造る。

最初に魔王と牝妻が訪れたのは「苗床厨房」。

「ンッオおおつごおおついつぐううう♥♥♥」

「んぶうううんぢゅううう♥ ごつくごつくううんつぶううう♥♥♥」

「ごおめらんひゃい魔族のくひえにメスにうまれでつごめんらっひぶつぶひっイイイイイ

♥♥♥

「牝穴ご奉仕でえいっしょう、苗床しまふがらああああ♥♥♥」

「んぶうんぢゅるうぶうううう♥♥♥ んっごつぐうううん♥ んっごつぐううう

ん♥

「————ッたまごおおつほおお♥ 牝イキさんらあんぎぼつつぢイイイイイイ

イ♥♥♥♥

肉塊でできた巨大な大樹に半身を埋め込まれそのまま種漬けされている大勢の牝たち、床の肉塊に上半身を埋め込まれて尻だけだした格好で産卵する牝たち、ポテ腹で触手に拘束されながらザーメンを飲みつつけながら尻孔を穿り回されている牝たち、たったいま産卵している牝たち。

勇者が二十卵を産み落とすと、孵化したうち十六体は強い魔物が育った。残り四体はむしろ弱い魔物が生まれた。しかしその四体は勇者同様に強い魔物を産み孕む袋としては優秀だった。

「部屋を拡張する必要があるな」

大勢の我が子らが、ひしめきあう苗床を見ながら思案する。なにせ元々人間が使っていた城、図面は把握しているが、いまだに使い勝手がややわからない。

さらには他にも母乳が出やすい我が子のために設置した部屋が幾つもあり、他にも侵略に必要な武器庫、備蓄庫、奪い取った資源保管庫など必要な部屋はまだまだある。

次に【家畜舎】とプレートが掲げられた。かつては王族の食事の間に使われていた広間。

現在は、家畜舎は牝牛と牝豚の我が子専用の部屋であり、魔王軍の食料を支えている大事な場所でもある。

「ほおおおおおでつりゅうでつりゅうおおおお♥♥♥」

「ぼんにゅううういぎいぎぼぢいいいいいいいいい♥♥♥」

「牝チ×ポオおおお♥ 牝チ×ポ♥ ビュービューもぎぼぢいろおおお♥♥♥」

床一面に笑が敷かれ、ギロチン板で両手首と首を拘束された爆乳、巨大乳を持つ牝魔物たちが四つん這いで横一列に並んでいた。触手の搾乳機に母乳を吸い取られている。花芯すら搾乳がとりつけられて大量射精しながら母親そっくりの金の瞳を蕩けさせながらアヘ顔で搾乳アクメに溺れている。

「相変わらず幸せそうな牝牛たちだな」

牝牛奴隷——母に負けず劣らずの大きな乳を持つ牝魔物。食料である母乳をだすのが役目だ。

「んほお……母乳疼いてええきまひらあ……♡」

「不許可だ」

「あひ♡」

牝妻の鼻輪を引っ張り方向転換を促す。

「おおおっばおおおおぶっひひひひひひひひひひ♡ 牝豚あああイギまぢゅうう♡♡♡」

「牝魔族の御子もはらめらああい♡♡♡ 劣等牝豚ああイギまぢゅうう♡」

「お、おゆるっひっをおおおっごおお♡♡♡ 牝豚あ謝罪受精あぐめぢまぢゅううぶっひっほおお♡♡♡」

畜舎内の左側からは常に粘着質な音が聞こえる。牝たちの凄まじい艶咆哮に混じって「ブヒブヒ」「ぶるるっ」と別の生き物の鳴き声や鼻息。

「……此方も変わらずだな」

牝豚奴隷——中々魔物を孕むことができない牝魔物たちのなかでも劣等中の劣等牝奴隷。それでも父親として支配者としての慈悲で、肉体改造を施して食料である家畜を孕みやすつくした我が子たちの総称である。

「オマエもいつかはここへ来るかもな」

「お、おとおお……♡」

今以上に無様な奴隷生活を妄想し、マゾ絶頂射精する始末の牝妻王妃に呆れてしまう。
家畜舎を離れて次は【娼婦寝室】

「おら孕めえ!!」

「んほおとお♡ しゅごい♡ いく♡ 牝魔物様チ×ポで受精イギすりゆう♡」

「へへへ、おら、テメーら軟弱な牝魔物の代わりに戦ってきてんだからもっと腰振って感謝しろ!!」

「おとおおおっほ♡♡♡ し、しましゆう♡ 牝様に感謝の牝イキアクメさせていただきます
ひゆううう♡♡♡」

ここにいる我が子たちは兵士たちに奉仕するのが役目、兵士と牝奴隷たちの乱交がひたすら繰り返されている。ここで孕まされた牝たちが苗床厨房へ行く。

「ふむ。ここも数が増えて、やや手狭になってきたな」

「……………あひィ♡ ドビュドビュって御せえしの音きいてるだけでええ…………♡ んっひ
ィィィ…………♡」

それから各部屋に必要な備品の確認、設備点検、まだ使っていない部屋の改造の検討……など考えながら城中を視察し回る。最後に玉座のある間へ。

「魔王陛下の御成りです」

玉座の傍に控えていたメイドたち——我が子達——が頭を下げる。メイドたちは強くはないが、細やかで気が利く、手先が器用などなど……母親の気質を受け継ぎ、孕み袋にするには勿体ないとメイドへ仕立てあげた。

「各部隊からの報告を聞かせろ」

「んっぢゅぶ、ぶぢゆるううう……♥♥♥」

玉座に腰かける魔王の股間へ張りつき、怒張へ口奉仕をしだす牝妻奴隷に対して誰も驚かない、平然としたままだ。ここではそれが当たり前の光景であり、常識だからだ。

「千将隊から定期報告—— “異常なし、このまま城へ帰還”」

「歩兵部隊から定期報告—— “異常なし”」

「百将隊から報告—— “奴隷や試験となりえるものは悪魔商会協力のもと、三日後に持ち出す予定”です」

「歩兵部隊へ百将隊の元へ行くよう指示だ。魔界の連中は此方の目がないとすぐ、金品をくすねとるからな」

「畏まりました、陛下」

「陛下、斥候兵より定期報告—— “北大陸のエルフが、各地方のエルフ族に収集をかけている動きあり”」

「人間の次に多いのがエルフだ。次の的になりやすいことをしつかり理解しているようだ……フフフ、それで勝てるかどうかは別だが」

人間に勝ったからといって終わりではない。多種多様な種族が大陸には根付いており、殆どが反勢力だ。それらすべてを支配するか滅ぼすか、それができてやつと魔王軍の完全勝利となるのだから。

「なあ、勇者？」

「だんあひやまの、ご活躍をきふああいひておりまひゅ ♡ ふあんんひひひ……♡」

堕ちた勇者が肉棒をくわえたまま、蜜色の双眸でうつとりと御主人様を見上げ敬愛をこめた言葉を吐く。頭を撫でられると気持ちよさそうに目を細めて、尻孔から下品な音をブヒブヒ鳴らして直腸汁を噴蜜させた。

魔王率いる魔王軍の快進撃はまだはじまったばかりである。

再録

背徳は、絢爛華美なり

2018年

淫従ヒーロー

2018年(おためし冊子)

Mary ButEnd Vulgar Wedding

2019年

ルナティックセレニティ

2019年

雑貨店メリー♥メリーカタログ冊子

2021年

敗北勇者。墮落の結婚式

2019年(フリーペーパー)

繁栄の魔王城

2021年(BOOTH通販／BOOST)

A5 短編凌辱収集

2018～2021 年 A5 本再録 DL 本

2023 年 4 月 22 日 発行日

【著者 編集】 カルビ
【制 作】 焼肉文庫
【表 紙】 かんたん表紙メーカー
【発行元】 Mail buekbe2@gmail.com

Twitter @NiKuZiRu2022

Pixiv 12050686

くるっぶ かるび/HP8u3KRSGFjzvr4

【 注 意 】

本書は成人向けです。

18 歳未満の方の目に触れないようお願いしま
す。無断転載・複製・アップロードを固く禁じま
す。